

グローバル時代のバナナをめぐる 地域間交流と文化の創造・再編過程

Interregional Exchange, Creation and Rearrangement
of Culture about Banana in the Global Era

佐藤 靖明 (Sato Yasuaki)

ローカル／グローバルの単純な二項対立の図式に当てはまらない人、植物、情報の地域間移動が活発化している。しかし、人一植物関係の研究において、それらの動向を理解するための一般的な方法や思考枠組みはまだ確立していない。そこで本研究では、グローバル化の重層性が明瞭にあらわれている作物であるバナナを事例とし、世界各地の地域間交流をとおして栽培・利用の文化が創造・再編される現象をめぐる、人、モノ、知識の新たなネットワークのあり方を見出すことを目的とする。

2021年度は、地域間でのバナナや情報のやりとりがみられる1と2の研究を進めた。

1. ウガンダの遺伝子組み換えバナナの導入をめぐる検討

東アフリカのウガンダでは、主食用のバナナが盛んに栽培・利用されてきたが、2000年代より病虫害による深刻な生産減に陥っている。その対策として、政府は遺伝子組み換え（GM）バナナの開発と一般での栽培に向けた法整備を進めている。本研究では、国際的な研究機関や支援団体が関係するこのGMバナナをめぐる、開発・普及にかかわる先行研究を整理するとともに、従来からバナナを栽培している農民の品種選択の側面に注目することで、新たな論点を提示して検討した。

まずポリティカルエコロジー論の研究から、GMバナナの開発プロセスにおいてドナー・政府・農民の間に目的や意識のずれ、断絶がみられ、その普及においてアクセスやコスト面での問題が懸念されていることを確認した。

一方、筆者による過去の調査結果から、農民は品種多様性を維持したまま慎重にGMバナナを取り込んでいくことを予想した。ただし、品種多様性を支える繊細な感性や知識が、GMバナナへの急速な置き換えによって失われることへの問題があることも指摘した。

2. 物質文化の現代的展開

バナナは果実だけでなく葉などの部位も広く使うことができ、プラスチックの代替品としての利用が世界各地で検討されている。本研究では、タイでバナナの葉を素材とした皿を作成・販売している先駆的な団体に注目し、その説明記事をもとに葉の加工法とその簡便性について検討した。

本研究では、アイロン等を用いて一定の温度・時間で熱プレスすると、葉が容易にしなやかで滑らかになることに注目した。そして、試行的に熱プレスを繰り返すことで、葉の厚さや温度、加熱時間によって、加工された皿の質が異なることを明らかにした。